人文科学とコンピュータ　36－5
（1997．11．15）

テキストクリティックの新しい地平―『日本霊異記』の電子テキスト化と校勘―

多田伊織
国際日本文化研究センター

パーソナルコンピュータの進歩は、これまで煩雑かつ高度に専門的だと思われていたテクストクリティックという営為を個人が容易に行う環境を与えた。テクストクリティックに必要な、異本の対照、校勘、校注、校異の付記は、階層化することでよりわかりやすくなり、これは電子的テクストの得意とする領域である。『日本霊異記』の校勘を通じて、電子的テクストによるテキストクリティックの実際と今後の可能性について述べる。

A new frontier in a text-critique - on elecronic filing documents and a critical edition of "Nihon-Ryoi-ki"

In China, traditional philoligy highly developed in these two thousands years. In Japanese studies, philological aspects were not a chief concern. To critique any classical texts seems so dilettante. But a development of computerization made a text-critique easier for a scholar. Elecronic filing documents and their hierarchical structures help us to realize deeply meanings of texts and to recognize apparently relations of variants. To accelerate to compurtize classical manuscripts in Japan can present more precise and excellent editions of classical Japanese literary works for us.

0、はじめに

さまざまな異本を参照して、ただしい一つのテクストを浮かび上がらせるのが、テクストクリティックである。文献学の領域に属する。

テクストクリティックは、一般にはあまり馴染みのある営みではないし、文献学自体、好事のものとして、あるいは自由な発想を阻むものとして退けられがちである。しかし、文献学は、中国、印度、西アジア、ヨーロッパのいずれの地域のものであっても、古典を学ぶものにはもっとも大事な基礎である。テクストクリティックなくして、テクストの読解は成立し得ない。

およそ古典とされるテクストは、不幸にして長い時の間に原本を失っている。原語のテクストが失われている場合すら珍しくない。今ギリシャ、ローマ、インド、ペルシャ、中国など古くから文明を誇った地域の古典を、長いものでは数千年の時を隔てて、我々が手に取ることの出来るのは、後世の多くの学徒による営々たるテクストクリティックの蓄積のたまものなのである。

無味乾燥で時間がかかる割には成果が上がらない、というのが従来のテクストクリティックへの偏見である。しかし、電子テクストの普及は、テクストクリティックに新たな光を当てた。

筆者は、87年にパーソナルコンピュータ(1)を導入していて以来、電子テクストによるテクストクリティックの可能性を試してきた。87年の段階では、マシンの性能もそれほどではなく、適当なソフトウェアもなかったために、筆者の意図する電子テクスト化は難しかった。当時は、日本語処理の出来るパーソナルコンピュータは日電の独自規格9801シリーズの独壇場で日本語OCRソフトの適当なものを入手できず、グラフィックデータとして取り込んだ文字を、テクストデータとして認識できなかった。その後、日本語OCRソフトが

市場にあらわれるが、認識率が低く、OSであるMS-DOSのメモリの制約もあり、テクストデータ入力にはかなりの時間を要した。筆者は弱視で一日の作業量が限られている。このため、専らATOK6-7のユーザ辞書をフルチューンして、文献固有の辞書をつくり、手入力するほうが速かった。

テクストの階層化については、マシン環境の貧しさからエディタ(2)で模擬的な階層的テクストを編集するのみだった。90年に提出した中国文学の卒業論文「甘泉賦論」には、注釈を階層化を想定したフォーマットで作成した「甘泉章句」を付録とした。

ようやくこの二、三年になって、使い勝手の良い環境が比較的安価に手に入れられるようになり、インターネットの爆発的流行は、電子テクストを一般にも身近なものにした。

ここでは、『日本霊異記』のテクストクリティックを通じて、電子的テクストとテクストクリティックの親和性を説き、ついで今後の方向について考察する。

1、校勘とは何か

中国ではテクストクリティックを校讐、校対、校書、校勘、校合などという。「校」は「くらべる、かんがえる」の意である。このうち、中国での代表的ないいかたは校讎であり、日本で使われるのは校勘、校合の語である。幾つかのテクストを対照して正誤異同を正し、注釈を付けることは、中国の文化人の嗜みであり、学徳であった。

清の章学誠は、その著『校讐通義』(3)において、校勘の方法と手順について次のようにいう。

古人校讐、於書有訛誤、更定其文者、必注原文於其下。其両説可通者、亦両存其説。刪去篇次者、亦必存其闕目。所以備後人之采択、而未敢自以謂必是也。班固併省劉 音欠 《七略》、遂使著録互見之法不伝於後世。然亦幸而尚在併省之説於本文之下。故今猶得従而考正也。向使自用其例而不顧劉氏之原文、今日雖欲復劉[音欠]之旧法、不可得矣。

（むかしの人の校讐は、書物にあやまりがあって、その文章をあらため定めた場合には、必ずもとの文章をその下に注記した。原文も改訂案も両方の説で意味が通るような場合は、やはりその両方の説を残しておいた。篇目を削り去った場合は、やはりきっとその欠けた編目を残しておいた。後世の人が選び取るのに備えたためで、自説が絶対に正しいとはまだようしなかったのである。班固が劉 音欠 の《七略》をあわせ省いて、とうとう著録を互いに参照する方法を後世に伝えさえなかった。しかるにやはりさいわいにもまだあわせ省いた説は本文の下に残っている。だから今もなおしたがうべき説を見て、書物の真偽・異同を調べただすことができるのだ。先に自分にはそのやりかたをつかわせているのに劉氏の原文を顧りみなかったので、今日われわれが雖欲復劉[音欠]のとった昔のやりかたを復元しようとしても、できないのだ。）

すぐれた校勘は学者の誇りではあるが、自説を絶対であるとはしない。章学誠のいうごとく、中国でのよい校勘には校異が付されており、ほかの読みを読者が選ぶことが出来る仕組みになっている。たとえば、いま中国学で『文選』を読む場合、『李善注文選』の善本として、宋淳熙本を翻刻した鄱陽胡氏本が用いられる。巻末には胡克家撰の『文選校異』が付されており、宋淳熙本のままでは読みがたい場合に参照すべき異文を連ねている。きちんと校勘されたテクストを校異を参考にするのが、より正しいテクスト読解への道筋であり、それは現在も中国の古典的な学問においては変わらない。

然るに、日本においては、校勘の学はさして盛んではない。山井鼎のような卓越した例外をおいて、テクストの良否を判断し、正しいテクストを校勘するという態度は希である。活字本全盛の現在では、異体字、俗字に対する注意は薄く、JISにない字を多用する古い書物は電子化に困難を抱えている。

『日本霊異記』においては、江戸時代

の好事家、狩谷棭斎の校勘以降、すぐれた校勘は行われていない。狩谷棭斎が参照し得た写本が二種類しかなく、明治以降になって、重要な写本が相次いで見つかっていることから考えると、いかにその校勘が驚異的な仕事であるかがわかるだろう。

昨年末、出雲路修氏の校訂が出るまで、実に長きに渡って、『日本霊異記』の根本的な校訂本はなかったといってもいいだろう。残念ながら岩波古典大系本の『日本霊異記』は、筆者の調査では、国会図書館本の扱いが不注意で、出版当時、一番新しく発見された来迎院本はなかった。

2、テクストクリティックの実際と電子化

では、『日本霊異記』校勘の手順と、電子テクストについて述べよう。

2-0 伝統的手順

『日本霊異記』は上中下の三巻全百六話からなり、全文中国語の文言文（所謂漢文）で記され、写本で伝えられている。『日本霊異記』の文献学上の困難は、善本がなく零本（不完全な本）のみが伝わっている、という点である。すなわち、テクスト全部を写した本はなく、上巻のみ、中下巻のみといった完本ではない写本しか存在しない。

テクストクリティックでは、まず、底本を定める。もっとも善い本を底本とする。『日本霊異記』では、如上の理由により一種類の写本を底本とすることはできないので、上巻は興福寺本、中下巻は真福寺本を底本とする。さらに底本と参照する対校本として、次の三種類の写本を用いる。上中下三巻ではあるが説話数が少ない旧高野三昧院蔵本は、原本は現在所在不明であるので最善の写本である国会図書館本、一番最近発見された中下巻の零本である来迎院本、下巻のみの零本前田家本である。校勘には都合五種類の写本を用いるが、このほかに狩谷　斎が校訂した『校本日本霊異記』、その校注である『日本霊異記攷証』以下現代に至るまでのさまざまな校訂本や論文を参照することになる。

以上が、伝統的な手順だが、電子テクストにおいては違うやり方をとる。

2-1 電子テクストの底本作成

まず、『日本霊異記』全文を活字本からOCRで入力する。筆者の作業時は、岩波新日本古典大系本が未刊であったので、小学館日本古典文学全集の旧版の『日本霊異記』を用いた(4)。古典全集本の利点は常用漢字に直されているので、OCR入力が比較的速く行えること、欠点は恣意的な校勘を付されていることである。作業日数は筆者一人でおよそ三週間かかった。

2-2 電子テクストの出力と各本との対照

できあがった電子テクストを三部プリント出力(5)、それぞれを「興福寺本・真福寺本」「国会図書館本」「前田家本」と対照した。真福寺本については国文学資料館所蔵のマイクロフィルムを、国会図書館本はマイクロフィルムを、前田家本は複製本を用いた。（興福寺本は未見）随時、岩波日本古典文学大系本、同新日本古典文学大系本、小学館日本古典文学全集旧版本、同新版本の校異および新潮社日本古典集成本の頭註を参照した。来迎院本については、誤写が多いのでプリント出力せず、複製本を見ながら、直接電子テクストを作成した。(6)

以上によって、各写本の電子テクストが作成できる。(7)

2-3 異文の列挙

電子化された部分については、各本が揃った段階で諸本の異同を列挙する。『日本霊異記』は中国語の文言で記されているので、異同の列挙には中国の伝統的な校讐の手法を用い、中国語で示した。この方法を用いたのは、(1)筆者は自分の『日本霊異記』校訂を中国語の文言を理解する人々に批判してほしいので、web上で公開する予定であること、(2)日本語で示すと字数が多くなりすぎること、の二点による。

以下に、下八縁の一部で実際に異文を

列挙している例を示す。最初の文は、OCR入力した古典全集本の本文で、次に、誤脱の甚だしい来迎院本の釈文（写本を活字に直すこと）を挙げる。来迎院本で（）で括ったのは、闕文（欠落している文字）である。そのほかの諸本の異文については、いちいちの文について列挙した。来、前本、真本、国本、高野本、攷証とあるのは、それぞれ、来迎院本、前田家本、真福寺本、国会図書館本、高野三昧院旧蔵本、狩谷棭斎の『日本霊異記攷証』である。

及以供上一切財物、奉繕写瑜伽論百巻、因設斎会。既而其像、淹然不現。

及以供上一切財物、奉繕写瑜伽論百巻、因設斎会。既而（其像）、奄然不現。来

及字、前本作乃、国本作反。

以字、前本作至。

因字、真本作同、前本闕、攷証以高野本改、故類本改作因。

会字、前本闕、国本作食。

既而二字、前本作已。

淹然二字上淹字、前本作奄、攷証以高野本改、故類本亦作奄。

不現二字、前本作見之、且下文闕。

2-4 校勘

列挙された異文から、もっとも適切と思われる文を選ぶのが校勘である。異文の列挙に〔〕で囲んだ部分を加え評価を示し、来迎院本の上に校訂文を挙げる。類本とあるのは、『群書類従』に収められた、狩谷棭斎の『校本日本霊異記』である。

及以供上一切財物、奉繕写瑜伽論百巻、因設斎会。既而其像、奄然不現。（校訂文）

及以供上一切財物、奉繕写瑜伽論百巻、因設斎会。既而（其像）、奄然不現。来

及字、前本作乃、国本作反

以字、前本作至

因字、真本作同、前本闕、攷証以高野本改、故類本改作因、〔従類本。〕

会字、前本闕、国本作食

既而二字、前本作已

奄然二字上淹字、前本作奄、攷証以高野本改、故類本亦作奄。〔従前本類本改。〕

不現二字、前本作見之、且下文闕

筆者の校勘の基本は、『日本霊異記』の言語的特性を中国語の文言と見ることである。つまり、所謂「変体漢文」ではなく、四字句を基本とした中国語の文言の文章として、『日本霊異記』の文章を捉える、ということだ。

先にOCR入力した際には、古典文学全集本の句読がそのまま残されていたので、各本と対照し、不適切な場合は句読を切り直し、読み換えた。

2-5 校注

校勘によって、従来と読みが異なった場合、あるいは説が一定していない場合については、按文のかたちで校注を加えた。これも中国語で付している。下八縁の例を挙げる。

将写瑜伽、発願未写、而淹歴年。（校訂文）

将写瑜伽（論）（発）願、未写而淹歴年。来

将写瑜伽四字、真本作将写瑜伽論五字、前本作将瑜伽写四字

按、来本作将写瑜伽四字。当削論字。

2-6 電子テクスト化

現在は、プレインテクストとして、校注までの作業を行っているが、将来的には、HTMLなど形式で、校訂文に(1)異同のある部分(2)校注のある部分にタグをつけてリンクしたい。

(1)の異文については、現在は釈文のみだが、写本の書き癖を反映できるものが望ましいと考えている。また、いちいちの写本の釈文全文と校訂文とをリンクできるような形式を探している。さらに、各写本の全体がグラフィックデータとして、ネット上で公開されるよう望んでいる。

(2)の校注については、『日本霊異記』全文で同じような言い回しや、特有の語彙、俗字があるので、同種のものを相互に参照できる形でのリンクと、校訂文から降りていくリンクの両方を考えて

いる。
さらに、中国語のみで校勘をおこなっているが、日本語訳をリンクさせることも可能であろう。

3、電子テクストのもたらすもの

3-1　電子化の利点

校勘は、従来平面的な作業と考えられていた（図１）。しかし、HTMLなどによりテクストにタグをつけると、簡単にテクストを階層化できるようになってから、校勘もしくはテクストクリティックが階層的なテクストであることが直観的に示せるようになった。（図２）校訂されたテクストは、さまざまな異本から要素を集めて確定されたものである。校訂テクストの下にはさまざまな異本が重なり合っているといっていい。

これまで、日本で校勘が一般の目に触れなかった原因の一つに、書冊体では、校異、校注をいちいちつけると膨大なものになるため削られたということがある。筆者が『日本霊異記』の校勘で中国語を用いたのも、日本語では(1)情報の内容量に比してファイルサイズが大きくなりすぎ、(2)指示対象を明示する校異・校注に不向きであるという言語的な障壁があったからだ。電子テクストはこうした問題をクリアーする。

写本間の重層的な対照からは、『日本霊異記』校勘のみならず、『日本霊異記』の諸説話が依った原話が浮かび上がることもある。(8)つまり、現『日本霊異記』の読みがたい部分に、以前のテクストの痕跡が残っている場合があるのだ。こうしたことも、電子テクストでは相互対照が容易であることから、気づくことのできた点である。

すなわち、校訂文と諸写本のみならず、『日本霊異記』とその原話や藍本との重層的なつながりも、テクストの電子化は明らかにするのだ。

3-2 電子化の問題点

先にJIS漢字について少し述べたが、写本という自由度の高い形式で書かれているテクストを電子化する際には、翻字の適否が問われる。写本を調査するうちに、現在活字本で行われている『日本霊異記』の校異には写本の書き癖が反映されていないことがわかった。ある本の同じ形の字が、二つ以上の読みを与えられていることがままある。活字と異なり、写本では、崩し方が似ていても異なる文字があり、それをどの字に当てるかが関心事となる。一人で一つの写本を読めば、書き癖にも気がつきやすいのだが、現在出版されている『日本霊異記』活字本の多くは、校勘に複数の人員を充てているようで、書き癖を読みこなすところまでは到達していない。

このことは、写本の伝写の間にも起こる。以下に挙げたのは、『日本霊異記』諸本間で起きた誤写である。似た形の字、写す元の本に破損などがあって字が一部しか写されなかった字、一字を二字に分けて写した例である。

○師と問　中八　攷証云、画問、恐誤字。按、未見画問氏、当作画師。問与師、草体相似。恐祖本既有誤記歟

○賃と債　下二五、下二六　賃与債、形相似

○辟と譬　中四一　按、譬下破損歟

○泊と向　下二五　泊左破損。向与白、草体相似。

○箭と仏前　下五　按、真本作仏前者、原作箭一字、分為仏前二字。

こうした情報は実際に写本を前にしないとわからない。そして、こうした情報を積み重ねて行くと写本の性格や系統もわかってくる。

誤写のデータは、写本のもとになった原写本の状態、また写し手の中国語力をも反映する。『日本霊異記』の成立は822年頃平安初期に置かれるが、894年の遣唐使の廃止によって、日本人の中国語力はどんどんと衰えていった。誤写はこの間の事情もあぶりだす。

誤写のデータを電子化された校勘に取り込むためには、翻字はもちろんのことだが、元になった写本の画像データが必須である。残念ながら、日本の古文書は秘蔵されているものが多く、国宝、重文に指定されているものでも、全体のマイ

クロフィルムを見られるものは甚だ少ない。写本の劣化は時を経て起こるのだから、今のうちに、主だった古文書をマイクロフィルム化し、電子的なアーカイブに収め、広く公開するのが望ましい。フランス国立図書館所蔵の敦煌文書は、夙にマイクロフィルム化されている。日本でも、文化庁が中心となって、国宝・重文クラスの写本を修復した際には、全体をマイクロフィルム化して公開するのが、日本研究のこれからの進歩を促すことになるだろう。

注

(1)EPSON 286Vとハンディスキャナの組み合わせ。

(2)Vz EditorとATOK7および各種MS-DOSツールの組み合わせ。Macintoshに付属するハイパーテクストを用いれば、できないこともなかったが、Macintosh自体はきわめて高価であり、日本語入力環境が貧しかったので適当とはいえなかった。

(3)『校讐通義通釈』　清・章学誠著　王重民通解　上海古籍出版社

(4)使用機種はMacintosh9500/120、Nikon SCANTOUCH、メディアドライブ　MacReader PRO v.3.0で読み込み、YooEdit v.1.63で保存。

(5)QuarkXPress 3.3Jで整版して出力。

(6)YooEdit v.1.63

(7)現在、各本の電子化は50%程度まで進捗。

(8)平成八年度日本宗教学会発表「コラプションと原テクスト ー『日本霊異記』の場合ー（同学会誌に概要）でその一部を取り上げ、博士論文『日本霊異記の研究』で展開）

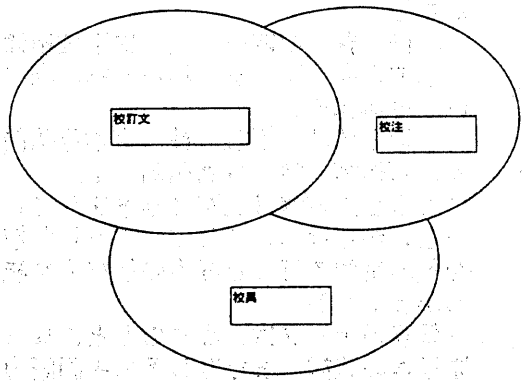

図1　平面的な校勘のモデル

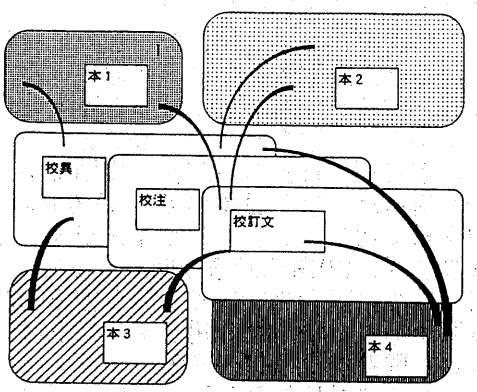

図2